遠江・山と里の民俗

会報　第013号

◇伝統芸能こどもサミット

声明文

〇私たちは、伝統芸能を継承していくために、正しく習い、多くの舞台に積極的に立ち、お客さんを巻き込んで伝えていきます。
〇私たちは、伝統芸能の楽しさを伝えるために、VRなどSNSを使って活動の宣伝をします。
〇私たちは、伝統芸能を途絶えさせないために、お祭や伝統芸能の行事に積極的に参加します。
〇私たちは、伝統芸能をより多くの人に知ってもらうために、楽しいことも大変なことも、みんなに体験してもらいます。

伝統芸能こどもサミットに参加したみなさん

議長の戸田さんとサミットのようす

グランシップを会場に去る8月23日（金）静岡県文化プログラム「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」関連企画として『伝統芸能こどもサミット』が、開催されました。県内の各地域で伝統芸能に取り組む10団体と県外1団体から総勢31名の子供たちが一堂に会し、日頃の活動における課題、これからに向けての期待などを話し合いました。

県主催のサミットや会議の行われるグランシップならではの円形のテーブルを囲んで雰囲気は上々でした。太鼓の実演もあって、体験に基づいた内容に焦点がしぼられた有意義なまとめができていきました。

浜松からの参加者

浜松市からは、川合花の舞で活動する北野谷泰梧さん（佐久間中3年）、神澤おくないを体験した荒木悠士さん（清竜中2年）、横尾歌舞伎で活動する戸田なつみさん（静岡大学教育学部附属浜松小4年）の3人が参加しました。浜松市からの参加者の、戸田なつみさんが議長を務め、会議を円滑に進行しました。

内容は、参加者が活動する団体紹介から始まり、掛川市出身の観世流能楽師・長谷川晴彦さんによるワークショップの後、4つのグループに分かれて実施した分科会を経て、全体会議を行いました。また、分科会や全体会議のファシリテーター（会議を円滑に運営・管理する調整役）として、静岡大学と常葉大学の学生が参加しており、若い世代が主体的に意見を出し合い議論を進めていました。

最後に、各グループで話し合った声明文を議長が発表し、サミットを閉会しました。

サミットに参加して

議長を務めサミット声明を発表した戸田なつみさんは「全体会議では、みんなが意見を言いやすくなるよう注意して進めました。声明文の発表は緊張したけど、伝統芸能のおもしろさや大切さを多くの人に知ってもらいたいです。10月の横尾歌舞伎定期公演も頑張りたいです」と感想を述べていました。ちなみに、10月12日(土)13日(日)の両日行われた横尾歌舞伎定期公演では『寿曽我対面　工藤館の場』に「大磯の虎」役で出演し、絢爛豪華な衣裳を纏った大役を見事に演じ切りました。

横尾歌舞伎　戸田なつみさん

全国的に担い手不足が問題となっている無形民俗文化財ですが、サミット声明のとおり、子供から青年までの若い世代の参加が促進されるよう、市を挙げての取り組みが必要な状況になっています。令和の時代を迎えた今、保存会の自助努力のみでは継承が困難な場面も生じていることから、浜松市としての新たな施策の展開に期待が高まります。

文責　柴田宏祐

浜松市の無形民俗文化財の将来像

文化財課長　太田好治

勝坂神楽を支える大学生

平成二十八年二月には、浜松市議会定例会にて、「浜松市民俗芸能の継承及び振興に関する条例」が、全会派一致（全議員）で発議され、制定されました。　また同年七月からは、浜松地域遺産（浜松市認定文化財）の募集を開始し、国・県・市指定の文化財以外に、地域の団体推薦によって、指定よりもゆるやかで、幅広い文化財の認定を続けてきております。昨年度までの三か年で計二百四十二件の文化財を認定し、今年度も七月から十月まで、募集を始めたところです。無形民俗文化財でも新たな認定から本連絡会への加盟につながった団体があると承知しております。今後も、市内の幅広い保護団体との連携に一助となれば幸甚でございます。

本紙でも既報ですが、平成三十年度は各団体が積極的に外部交流にご活躍でした。詞章集の相次ぐ発行、横尾歌舞伎のロシア・ユジノサハリンスク公演、西浦田楽の国立劇場公演、それぞれ大きな注目を集めました。

勝坂神楽など、市内の大学との連携もさかんで、共同研究も複数個所で進行中です。

今後とも、文化財課はできる限りご支援してまいります。また、地域遺産センターを利用したご紹介にも努めてまいります。

広い市域には、指定文化財や認定文化財だけでなく、まだまだ未指定の無形民俗文化財もございます。南北に広い市域では、年中行事まで含めて祭礼も豊富で、地区ごとに新暦と旧暦の行事が錯綜しているのも特色です。一年中、三百六十五日、市内のどこかで祭礼があると言っても過言ではないほどです。

浜松の芸能を披露する子どもたち

しかしながら、多くの地区で祭礼や年中行事の継承には課題を抱えているのも実情です。中山間地だけではなく、市街地の祭りも同様の課題があります。文化財は、地域の個性を際立たせる、文字通り地域の宝です。次の世代に継承するためにも、さらに幅広い支援の枠組みをご一緒に構築したいと思います。

◇これからの予定

○懐山おくない
一月三日　午後一時
天竜区懐山　泰蔵院

○寺野ひよんどり
一月三日　午後二時
北区寺野　宝蔵寺

○川名のひよんどり
一月四日　午後六時
北区川名　八日堂

○滝沢おくない
一月一日　午前十時四所神社
一月四日　午前十時林慶寺
北区　滝沢町

○神澤おくない
一月四日　午後二時
天竜区神澤　六所神社

○東久留女木万歳楽
二月一日　午後六時
北区東久留女木　如意院

○息神社　田遊祭
三月一日　午前十時
西区雄踏町息神社

○妙功庵観音堂百万遍念仏講
一月十三日
北区細江町中川（刑部地区）

○雄踏歌舞伎「万人講」
一月十九日
西区　雄踏文化センター

○西浦田楽
二月十一日
天竜区　西浦観音堂

※寒い時期ですがお誘い合わせて見学してください。

次世代継承
三遠南信伝統民俗芸能公演
長野県阿南町
早稲田人形浄瑠璃
2月11日（祝）
14時00分
会場　クリエート浜松
入場料　５００円
主催　みらいネット浜松
☎０５３-４３９-５５８５（柴田）

三遠南信文化圏
文化とエコロジーとの共存

NPO法人雲を耕す会 理事長 池谷 豁

谷の文化

司馬遼太郎は、日本は谷の文化であると言った。三遠南信を歩いてみれば、そのことがよく分かる。三遠南信の谷々には、ずっと変わらない暮らしが、今なお息づいている。人々の心の中に、伝統文化を守り育ててきたというより、それしかなかったからという素朴な思いがある。その気負いのなさが、文化論を越えて、地域の風土の中にうまくとけあう。

三遠南信の県境を越えて、人と文化の交流が行われてきた。鉄扉のごとく固められた幕藩体制の中で、「くに」を跨いで文化圏が一つになる所は全国で「越中・飛騨」「陸中・陸奥」と「三遠南信」の三か所しかない。

古来、天竜川水系という文化圏はあった。全国で五十ヵ所くらいしかない田楽が、三遠南信には十ヵ所以上もある。花祭りも加えれば、その数の多さはきわだっている。諏訪湖を水口とする天竜川ならば、神の通い路といわれるのも分かる気がする。

照葉樹林に囲まれた池川邸（中区）

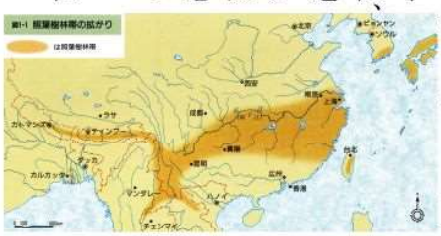
山と海を行き来する塩の道が、遠州灘から諏訪湖まで続き、秋葉信仰と結びついて秋葉街道となる。見付の早太郎は信濃の光前寺へと走り、桜が池のお櫃は諏訪湖へ流れ着いた。長い年月の重なりが、川と道のネットワークを形成し、ひとつ三遠南信文化圏となっていった。

照葉樹林

三遠南信の森はスギ、ヒノキの人工林が目につく。人の手が入る前は、すべて照葉樹林であった。照葉樹林というのは、シイ・クス・カシ・ツバキ等の常緑広葉樹を主とする森だ。葉は冬でも深緑色のままで、葉の表面がてらてらと日に照らされている。

三遠南信の森は鎮守の森にしろ、里山にしろ、もこもこと生い茂っている。子供の頃、遊んだ森は空を隠してうっそうとしていた。これが照葉樹林の特色である。子供のころ、台地の縁に立つと、丸い森がいくつも見られた。その森が三遠南信文化圏をすっぽりと包む。

遠州の森から始まって西南日本、中国の長江、雲南を通って、アジアの温暖多雨地域へとつづく。ベトナム山岳地帯・ブータン、ネパールのヒマラヤ地方。延々と六千kmもの距離を照葉樹林文化は広がる。少数民族の人たちが語ってくれた生活のひとこまひとこまに、三遠南信の昔が蘇る。



照葉樹林文化圏

焼き畑

照葉樹林地帯は驚くほど共通の文化を持つ。茶・ソバ・納豆・なれ鮨・豆腐・コンニャク・酒・味噌・山菜。故郷の味と言われるほとんどの食べ物が、照葉樹林に源を発している。三遠南信で木の実やソバの食文化が発達していることに思いが行く。

食べ物だけでなく、羽衣・サルカニ合戦・花咲爺などの昔話、さらに鵜飼いがそうである。絹織物・草木染め・紙漉き・漆等の伝統工芸も照葉樹林から生まれた。私たちの文化の古層に、照葉樹林文化が深く刻み込まれていた。

照葉樹林文化は稲作文化の伝わる前からあった。その最たる特色は焼畑である。緑濃い森林を、焼畑によって切り開いて、アワ・ヒエ・ソバ等の雑穀、里芋や山芋等の芋類を生産していた。

三遠南信地域でも昭和三十年代まで焼畑が行われていた。夕焼けの山の斜面に白煙が立ちのぼり、赤い炎がチラチラと見えた。山に火入れをするときは、山火事がこわい。秋葉信仰は焼畑の火防と結びついていった。昔から火は畏れ多い存在であった。

歌垣

春と秋の月のきれいな夜に、若い男女が集まってきて歌の掛け合いをする。愛情を交換するこの習俗は、万葉の時代に歌垣と呼ばれていた。照葉樹林帯では今も見られる。

わたしは照葉樹林帯を旅した。入り母屋作りの茅葺き屋根、青田の中を行く農夫に菅笠が乗かっている。草笛を吹きながら村を回っているうちに、昔の日本の田舎を歩いていると錯覚した。

三遠南信を分け入っていくと、心のうちがいつまでもほこほこと温かいのは、歳月の降り積もる重なりではないだろうか。舞い下りる落ち葉が地面を暖めるように。

歌垣を思わせる踊り　ベトナム

遠州大念仏

副会長　渥美位茂

大念仏は今も浜松市の浜北区から東区・西区・北区・天竜区、磐田市、袋井市、森町一帯には「遠州大念仏」が伝承され、初盆を迎えた家庭に招かれて演じられています。各地の集落に根差した大念仏の団体は土地の名前をとって「遠州大念仏〇〇組」と名付けて地元を中心に活動しています。

大念仏の一行は、その家の手前で隊列を組み、統率責任者の頭先（かしらさき）の提灯を先頭にして、笛・太鼓・鉦（かね）の音に合わせて行進して庭に入ります。笛・太鼓・鉦（かね）・歌い手、そのほかもろもろの役を含めると三十人を越す人数となります。

庭先に入ると、双盤（そうばん）を中心にして、その前に太鼓を置いて、音頭取りに合せて念仏や歌枕を唱和します。そして、太鼓を勇ましく踊るようにして打ち鳴らし、初盆の家の供養を行います。

故人のありし日の姿を謡い込んだ「うたまくら」の哀愁を帯びた調べに親戚縁者は涙を流しながらも、いつしか激しく打ち鳴らす太鼓のリズムや所作に陶酔して大念仏の一夜は佳境に入っていきます。

その起源は

この起源について、「三方原の戦い」で戦死した将兵の霊が害虫になって人々を悩ませたので、徳川家康が供養を始めたといわれています。

江戸時代のもっとも盛んな時には、約二百八十の村々で大念仏が行われていましたが、現在も約七十の組が遠州大念仏保存会に所属し活動しています。

大念仏のまとまりを

盛んになった大念仏も明治維新の神仏分離政策によって始まった廃仏毀釈で減少していきました。日清・日露戦争の戦死者の霊を慰めるためや武運長久を祈るために増加しました。それぞれが「遠州大念仏」と呼ばれながら、大きな差異が出ていました。

そこで、大念仏の技量を高め、相互の連携を図るために、一九三〇(昭和五)年一月十五日に遠州大念仏発祥の地である犀ヶ崖の宗円堂(中区布橋)で大念仏組の連合組織「遠州大念仏保存会」を結成しました。以来、組同士の連携を図り、向上に寄与してきました。

来年は統合九十周年

統合以来、十周年ごとに記念行事を実施して相互の結びつきを図ったり、乱れがちな風紀を正したりしてきました。

今回九十周年を迎えるにあたり、遠州地域の貴重な民族芸能として継承するために浜松市からも協力を得て開催することになりました。

浜松市との準備打合せでは三遠南信文化圏の中の念仏踊りの一環として、長野県阿南町和合の念仏踊りや愛知県新城市大海の放下などの市外・県外から共通性のある念仏踊りお招きできないか交渉を進めているところです。

遠州大念仏保存会　浜松市教育文化奨励賞受賞

無形民俗文化財を継承する団体として、地域や学校等と多様な年代が参加する地域行事としてコミュニティ活動の活性化に寄与したりしていることが大きく評価されての受賞です。さらに外部公演等の公開事業に取り組むことで、浜松の特徴的な歴史文化が再認識されると共に、「創造都市・浜松」の推進に寄与しているという多大な評価を受けたことは大きな励みになったことと思います。

これまで、ともすると宗教活動してのみ見られてきた大念仏が、改めて文化財として認められての受賞は画期的なことであるといえましょう。

遠州大念仏　統合九十周年記念大会の予定

〇期日　令和二年九月十三日（日）
〇会場　浜北文化センター大ホール
〇出演　浜松　大念仏団　数団体
　市街・県外の念仏踊り保存会各団体

編集 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行 浜松市　電話〇五三-四五七-二四六六